

用水不足

5月

水 稲

水稲が最も水を必要とする時期は、穂ばらみ期（出穂前15日～出穂直前）が最大で、次いで、幼穂形成期（出穂前25日～15日まで）と田植直後から分げつ前期（田植えから田植え後10日～15日まで）、出穂開花期の順である。一方、分げつ期の後半は、少ない水量で足り、特に無効分げつ期（田植え後25日～30日から出穂前25日まで）は、ごく少量で足りる。

これらのことから今後の用水量を考慮して、生育ステージに応じた適切な水管理と計画的な配水を行う。

1 早期栽培（4月下旬～5月上旬植えコシヒカリ）

無効分げつ期で中干し時期にあたるためかん水の必要は少ない。なお、強い中干しはその後のかん水量が多くなるので、中干しの程度に留意する。

2 短期栽培（5月中旬～6月上中旬植えコシヒカリ）及び普通期栽培（6月中下旬植えヒノヒカリ、おいでまい等）

田植えは、用水の確保状況に応じて計画的に行う。特に、用水の確保が困難な場合は、田植えを遅らすなどの対策を講じる。

活着期及び除草剤散布後は湛水状態とし、その後は黒乾きを限度に浅水管理とする。無効分げつ期に入れば中干しを行う。

3 その他の留意事項

無駄な水を逃がさないよう、かんがい施設等の点検・整備を行い、排水口や畦畔からの漏水防止に努める。

今後田植えを予定している地域では、耕起・代かき時において、できるだけほ場の均平化を図る。こうすることで、入水量を必要最低限にできるほか、効果的な雑草防除や均一な生育管理が行える。なお、代かきは浅水で行う。

水稲の節水栽培については、「**水稲節水栽培基準**」を参照する。

茶

1 かん水施設のあるところでは、スプリンクラーかん水を行う。かん水量は4～5日間隔で、1回あたり20mm程度を目安とする。

なお、保水性が劣る花崗岩土壌等ではかん水間隔を短くし、1回あたりのかん水量を少なくする。

2 かん水施設のないところでは、土壌表面の蒸散を抑えるため、敷草、敷藁を行う。また、養水分の競合を避けるため、除草に努める。

3 病虫害の発生が予測される場合や、二番茶の摘採を予定している場合は、農薬の安全使用基準に沿って防除する。

野 菜

1 かん水、土壌乾燥の防止

かん水チューブ等を設置していないほ場で、畝間かん水できる場所は、畝間に水を流す。この場合、長時間、畝間に水がたまると根が傷む場合があるので多量の水を長時間、畝にためないように注意する。特に、土壌の乾燥が続いている場合の初めてのかん水は、土壌が湿る程度の量とする。畝間かん水ができない場合は、水中ポンプや動力散布機等を利用して、ホースで畝の肩や畝間にかん水を行う。

かん水チューブ等でのかん水が可能である場合で、水量の確保ができるほ場では、生育に合わせた定期的なかん水に努める。水量が限られている場合は、回数を減らして一回当たりのかん水量を多くし、根群全体に水分供給ができるようにする。

また、マルチなどにより土壌からの蒸発を防ぐ。

2 施肥、草勢維持等

土壌が乾燥している状態では、肥料が溶けにくいため肥効が遅れる。露地栽培は雨の前に、施設栽

培の場合は、かん水前に施肥を行い肥効を高める。雨が降らない場合の露地栽培や水の確保が難しい施設栽培では、液肥や葉面散布剤を活用して肥料不足にならないよう、草勢維持に努める。

果菜類については、草勢維持のために適正な着果量、葉数になるように管理を行う。

土壌の乾燥が続くとトマト、ミニトマト、ピーマン等では、「心止まり」、「尻腐れ果」の発生が心配されるので、カルシウムを含む葉面散布剤を花房、新葉、生長点に十分な量がかかるように葉面散布する。

3 病虫害防除

乾燥後のかん水により、肥効が高まり軟弱徒長し、病気の発生が心配される。また、気温の上昇と乾燥によりアブラムシ類、アザミウマ類、ダニ類、うどんこ病等の発生も予想されるので、防除に努める。

果 樹・オリーブ

1 土壌乾燥の防止

根群の多く分布しているところに敷わら、敷草等を実施し、土壌からの蒸散を少なくする。雑草が繁茂している場合は、刈取りを行う。なお、除草剤を使用する場合は、農薬使用基準に沿って処理することとし、接触型および吸収移行型を使用し、土壌処理型は使用しない。

2 樹勢の維持

モモ、スモモ、ナシは、子房や果実の細胞分裂が最も盛んで、肥大量も旺盛な時期である。できるだけ、頻繁なかん水を心掛け、樹体へのストレスを避けるよう努める。開花期間中の果実については病害防止のため、かん水は控える。

3 かん水（節水利用）

水の確保量を勘案して、水量が十分確保できない場合は、細根が多く分布している部分へ集中的にかん水を実施するか、土壌表層に溝を掘り、その部分にかん水する。また、ドリップチューブを用いた点滴かん水法が効果的である。

4 病虫害防除

高温乾燥下では、ハダニ等が発生しやすい条件となるので、発見した場合は、早めの防除を心掛ける。

花 き

1 敷わら、敷草の励行

稲わら、刈草等を敷き、土壌からの蒸散を抑制するとともに、地温の上昇を防ぐ。

2 病虫害防除

ダニ、アブラムシ、スリップスなどの発生が多くなるので防除に努める。高温時の散布は薬害が生じやすいので、朝夕の涼しい時に薬液濃度を薄めにして散布する。

3 かん水

かん水時刻は高温時を避けて、早朝あるいは夕方行うのを原則とする。

限られた水量を使用する場合、回数を減らしても一回当たりのかん水量を多くし、根群全体に水分供給ができるようにする。

4 遮光資材の利用

高温障害が予想される場合は、遮光資材（透過率 80%程度）を掛けて、気温の上昇を緩和する。特に定植から活着期にかけては、寒冷紗などで遮光し、活着促進を図る。

5 施 肥

追肥は高温・干ばつが解消されるまで中止し、もしどうしても必要な場合は、置き肥でなく薄めの液肥を与える。

6 電 照

キクなど高温乾燥によって花芽分化を起こしやすいものは、電照開始時期を早めるとともに電照時間をやや長くし、電照量を多くする。

7 土寄せ

根量を増加させるため、できるものは株元に土寄せし、新根の発生を促す。

畜産

1 家畜管理

家畜の飲用水を確保することは当然のことながら、夏季の防暑対策はできるだけ早めに開始する。畜種により多少異なるが、畜舎内の平均気温（午前10時の気温が目安）が24～27℃になると、泌乳量や産卵率等が低下してくるので、直接、家畜に影響が出る前に防暑対策を実施して、家畜の事故発生と生産性の低下を防止する。

1) 畜舎環境の改善

- ①ファン送風の実施、通風の改善
- ②直射日光の遮光、日陰樹の利用
- ③飼育密度の軽減等

2) 飲用水および飼料の管理

- ①十分な飲用水の確保（必要ならば貯水タンクの設置）
- ②飼料の早朝および夜間給与（比較的涼しい時間帯に実施）
- ③飼料保管管理の徹底による変敗防止等（配合飼料タンクに風車式換気蓋の設置等）

2 飼料作物

飼料用トウモロコシやソルガム等の播種期であり、降雨が少ないと干ばつが発生しやすくなる。トウモロコシを栽培する場合は、耐干性の強い品種を選択する。ソルガムはトウモロコシより耐干性が強いので、長期的に少雨傾向が予想される場合はソルガムの栽培を選択する。